

『夢占逸旨』 版本の系譜と修訂意図について―内篇異同箇所 の考察から

清水洋子
(人間文化学科)

明末嘉靖年間に刊行された陳士元『夢占逸旨』の版本の中で現在広く流通するのは、清代になって刊行された『芸海珠塵』所収本であるが、比較対象となる版本の数が不十分なこともあり、その資料的性格についてはこれまで論じられてこなかった。本稿では、近年調査を行った嘉靖年間本と他版本との比較により、『夢占逸旨』版本の系統について考察する。【キーワード 『夢占逸旨』 陳士元 明末】

一、はじめに

中国古代より人々の精神的営為を支えてきた占夢については、それを現実的な方策として活用する立場とそれほどの価値を見出さない立場とがありながら、占夢の需要自体はその後も絶えることがなかった(注1)。このことを裏付けるのは、夢や占夢について論じ、それらの事例を集める「夢書」の存在である。

歴代の史書に見える図書目録を見る限り、これらの夢書自体は一定の範囲で供給・継承されていたことが窺える(注2)。その多くは占辞が配列されたもので、「占夢書」や「解夢書」という名称を含むが、その大半は散佚もしくは敦煌文書残巻や出土資料として僅かに現存するのみで(注3)、夢書間の関連性について知ることは困難なのが現状である。

また、断片的に確認できる夢の事象や占辞の内容は、時代や人々の生活の変化を反映してか必ずしも一様ではない。加えて、唐代を転換期として現れた、読者を幻想的世界へと誘う夢物語(沈既濟「枕中記」、李公佐「南柯太守伝」など)が創作的な「夢」の世界を披瀝して熱狂的に迎えられた陰で(注4)、占夢書は現世利益に直結するものとして淡々と人々の日常生活に溶け込んでいたものと思われる。しかし明代に入ると、夢や占夢そのものに対する興味が人々を夢書の編集へと駆り立て、夢書が立て続けに刊行される。当時における好古の傾向も関係してか、これらの夢書には古い時代の占辞も積極的に収集され、その規模は百科事典さながらの大部なものであった。こうした現象には、明末が書籍刊行の隆盛期という、中国出版史において特筆すべき時代であったことも少なからず関係するであろう(注5)。

明清の蔵書家による図書目録を参考すると、陳士元(注6)『夢占逸旨』、張鳳翼『夢占類考』、『夢林玄解』等の夢書が程度の差こそあれ(注7)流通していたことがわかる(全て現存)。中でも『夢占逸旨』(注8)には、以下の通り明の嘉靖年間刊本をはじめとする複数の版本が現存する。

① 嘉靖本：明嘉靖壬戌(一五六二)刊本

- ② 万曆本：明万曆癸未（一五八三）刊行『帰雲別集』所収
- ③ 嘉慶本：清嘉慶年間刊行、呉省蘭輯『芸海珠塵』所収
- ④ 道光本：清道光癸巳（一八三三）刊行『帰雲別集』所収

その他、『夢占逸旨』の大部分を引用する夢書の存在も確認できるが、本稿では先に挙げた『夢占逸旨』版本を主に引き上げた（注9）。

① 嘉靖本と② 万曆本は、陳士元自身が明末に刊行した初期の版本である。② 万曆本を収録する『帰雲別集』は自著の選集で、先だつて刊行された① 嘉靖本が再録されている。両者を比較すると同じ版木を使用していることが認められ、確認できる異同も僅かである。また、両者のみに共通する点として、注釈者である陳堦の名が明記されている。

③ 嘉慶本は基本的に① 嘉靖本、② 万曆本の内容をほぼ踏襲する版本と言えらる。一方の④ 道光本は、書式の相違等も含めて上記三者との間には細かな異同がかなり認められる。このことから、③ 嘉慶本と④ 道光本とはその性質も大きく異なると言えるが、ならば両者は① 嘉靖本もしくは② 万曆本をどのような形で再刻、重刻したものなのか。

陳士元の著作は少なくとも明末において入手困難なものであったようで、① 嘉靖本と② 万曆本も例外ではない。これらは後に複数の叢書に刻入されてからようやく広く閲覧されるに至った。『夢占逸旨』の場合、特に広く読まれたのは、呉省蘭（注10）『芸海珠塵』所収の『夢占逸旨』（③ 嘉慶本）であり、これが現在最も簡便な版本である。③ 嘉慶本に次ぐ簡便な版本となるのが、重刻本『帰雲別集』所収の『夢占逸旨』（④ 道光本）である。しかし、これら版本の性格や精度はもちろん、版本間の異同についてはこれまで問題視されてこなかった。

とはいえ、このことはすぐさま③ 嘉慶本が最善の版本であることを意味しないであろう。叢書の収録本という性格上、③ 嘉慶本の流通量が他の版本を凌いだため、他の版本の存在自体が希薄となり、版本間の異同にまで検討が及ばなかったというのが実情かと思われる。そこでこれら兩種を比較してみると、典拠の引用や書式に粗雑な点が見える④ 道光本に対して、③ 嘉慶本は比較的整っていること、一方で③ 嘉慶本には④ 道光本にない失誤が見えることなど、慎重に検討すべき点も存在する。しかし、これまではこれら清代の版本以外に対校する版本の存在が不明瞭な状態であったため、『夢占逸旨』の版本研究というテーマ自体が生じ難い状態であった。ところが近年、『夢占逸旨』の原初形態を残す明末の版本（① 嘉靖本・② 万曆本）の存在も明らかとなったため（注11）、これら複数の版本を総合的に検討することが可能になった。そこで筆者が『夢占逸旨』内篇に限り校勘作業を行ったところ、主な特徴として以下の四点が確認できた。

（ア）注釈者陳堦の名は① 嘉靖本、② 万曆本のみに記載されており、それ以降の版本（③ 嘉慶本・④ 道光本）では削除されている（この① 嘉靖本・② 万曆本を「系統Ⅰ」とする）。

（イ）しかし、内篇の内容に関して言えば、系統Ⅰと③ 嘉慶本はよく一致する（③ 嘉慶本を「系統Ⅱ」とす

る)。

(ウ)系統Ⅰ・Ⅱと④道光本との間には、およそ三百例を超える異同が確認できる(注12)(④道光本を「系統Ⅲ」とする)。

(エ)ただし、系統Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ間には、例外的な異同が複数パターン認められる。

「系統Ⅰ・系統Ⅱ」と系統Ⅲとの間に異同が三百超も見えることは特筆すべき点ではあるが、それ以上に注目すべきは(エ)の「例外的な異同」であろう。これは、『夢占逸旨』の版本系統が「系統Ⅰ＝系統Ⅱ≠系統Ⅲ」という単純な構図では語ることができないものであり、なおかつ版本流伝の過程において、底本に対して各版本がとった方針が何かしら存在していたことを示唆していよう。そこで本稿では、この問題を考えていくための試案として(エ)に該当する異同の詳細を検討し、特に③嘉慶本と④道光本の性格を明確にしつつ、『夢占逸旨』の版本間の関係について整理したい。

二、版本間の異同について

今回の検討において、以下表にまとめて示すものは以下の四類である。

- 第1類：①嘉靖本と④道光本が同じ。③嘉慶本が異なる。(①＝④≠③)
- 第2類：③嘉慶本と④道光本が同じ。①嘉靖本が異なる。(③＝④≠①)
- 第3類：①嘉靖本、③嘉慶本、④道光本、が同じ。(①＝③＝④)
- 第4類：①嘉靖本、③嘉慶本、④道光本、が異なる。(①≠②≠③)

〈第1類・表〉①嘉靖本と④道光本が同じ(③嘉慶本が異なる)

			1	①嘉靖本	③嘉慶本	④道光本	備考
		2	湖東王繹金楼子曰	湖東王繹金楼子曰	湖東王繹金楼子曰	湖東王繹金楼子曰	※
	3	宋公夢鳥	宋公夢鳥	宋公夢鳥	宋公夢鳥	宋公夢鳥	※
4	己化為鳥集於啓身	己化為鳥集於啓身	己化為鳥集於啓身	己化為鳥集於啓身	己化為鳥集於啓身	己化為鳥集於啓身	※
			1	霾雨土也	霾雨土也	霾雨土也	▲

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5
周公旦立後嗣	朕夢遂事寤驚予	太子發	削遠為近揉大為小者	狸服之地	昼有漫想也	建厭之会	朕有五行之隸、 夢有五行之朕、	三皇之事	國之所賴以止訛者也	夢帝謂己	又壞室	夢以其帷幕孟子之廟	莊子盟於祿祥	嬖人媯始	以入羽泉
周公旦立後嗣	朕寤遂事驚予	太子發	削遠為近小者	狸服之地	昼有慢想也	建厭之位	朕有五行之隸、 夢有五行之朕、	二皇之事	國之所賴以正訛者	夢帝謂己曰	又壞戶	夢以其帷幕孟氏	莊公盟於祿祥	嬖人媯始	以入羽淵
周公旦立後嗣	朕夢遂事寤驚予	太子發	削遠為近揉大為小者	狸服之地	昼有漫想也	建厭之会	朕有五行之隸、 夢有五行之朕、	三皇之事	國之所賴以止訛者也	夢帝謂己	又壞室	夢以其帷幕孟子	莊子盟於祿祥	嬖人媯始	以入羽泉
※		▲		※	▲			▲	※		※	※	※	※	※

25	使知懼	外内使知懼	使知懼	
24	傾倚欵邪	傾奇欵邪	傾倚欵邪	
23	榻上	榻上	榻上	▲
22	傍人有聞者	旁人有聞者	傍人有聞者	
21	夜神呪可辟惡夢	夜神呪可避惡夢	夜神呪可辟惡夢	

例外を除き(注13)、第1類に該当する異同は二十五例認められる。『夢占逸旨』は、陳士元による本文と陳塔による注釈で構成されている。注釈の基本的方針は、本文が拠つたと考えられる、もしくは関連する典拠の書名と内容を明示することであり、注釈者独自の解釈が入ることは少ない。

〔第1類・表〕に挙げた二十五例のうち、本文における異同は四例(3・13・17・19)である。残り二十一例は注釈における異同であり、その多くが現在でも確認可能な典拠を引いている。もちろん文献によっては現行本のみで明確にできないものもあるが、それらの典拠を再度確認することで、異同の性格をある程度考へることは可能となる。紙面の都合上、ここでは全ての詳細を挙げることはできないため、以下数例を挙げながら、異同についての考察で明らかにしたことをまとめていきたい。

この第1類から窺えるのは、③嘉慶本と④道光本の系統Iに対する修訂の有無と、③嘉慶本における修訂の性格である(注14)。二十五例のうち、③嘉慶本が系統Iの失誤を正すものは十一例と第1類のほぼ半数を占める(〔第1類・表〕「備考欄」の「※」を参照)。そして同時にこの数は、④道光本が②万暦本に対して見落とした失誤の数でもある。

2・6・7・8・16・20は人名、地名の誤りを正し、3・4・11は形状の似た文字ゆえの誤りを正したものである。こうした点からは、④道光本に比して③嘉慶本における校訂が行き届いているという印象を受ける。しかしながら、その③嘉慶本にも失誤は認められる(1・12・15・18・23)。例えば1の場合、①嘉靖本と④道光本には「霾雨土也」(昼夜篇、注)、③嘉慶本には「霾雨土也」とあり、これは『詩経』邶風終風の鄭箋から引いたものとされている(注15)。しかし『詩経』には「霾雨土也」とあり、霾とは土砂が雨のように降る気象現象であることがわかるため、③嘉慶本の「土」は誤りだと確認できる。このように、他の四例も③嘉慶本の失誤であることが典拠元によって確認できる(〔第1類・表〕「備考欄」の「▲」を参照)。

以上のことから、第1類では、『芸海珠塵』収録に至る過程で、③嘉慶本が系統Iの失誤を正そうとしていた状況が確認できる。③嘉慶本自身も一定の失誤を残すものではあったが、③嘉慶本の基本的方針が主に「底本の修訂」にあったことは確かであると思われる。

〔第2類・表〕③嘉慶本と④道光本が同じ（①嘉靖本が異なる）

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
繡綽占禄山怪夢	六書精蘊曰	大人太卜之属	使大人占之	封太叔焉	寔述於博物之子産	猷子痺疽而卒	宋人伐曹	泣而為瓊瑰盈其襟	微在之房	覺若有感	太公有徳	公経曰	周官太卜	子産	①嘉靖本
幡綽占禄山怪夢	六書精蘊	太人太卜之属	使太人占之	封太叔焉	寔述於博物之子産	猷子痺疽而卒	宋人伐曹	泣而為瓊瑰盈其懐	微在之旁	覺有感	太公有徳	公経	周官太卜	左伝子産	③嘉慶本
幡綽占禄山怪夢	六書精蘊	太人太卜之属	使太人占之	封太叔焉	寔述於博物之子産	猷子痺疽而卒	宋人伐曹	泣而為瓊瑰盈其懐	微在之旁	覺有感	太公有徳	公経	周官太卜	左伝子産	④道光本
◆							◆	◆			◆				備考

19	18	17	16
開通先明	清梨鮮好	太姒夢見商之庭産棘	禄山夢衣袖長至階下
開通光明	清潔鮮好	太姒夢見商之庭産棘	禄山夢衣袖長至階下
開通光明	清潔鮮好	太姒夢見商之庭産棘	禄山夢衣袖長至階下
◆		◆	◆

第2類に該当する異同は十九例認められ、うち本文における異同は三例(2・10・12)である。残り十六例は注釈における異同であり、うち系統Iの失誤を③嘉慶本と④道光本がそれぞれ正したと考えられるものが七例(4・7・8・15・16・17・19)認められる(第2類・表)「備考欄」の「◆」を参照)。例えば、15・16・17は人名の誤りを正した事例である。特に15・16の場合、①嘉靖本(②万曆本)(注16)では同一段落内で正しい人名と誤った人名が混在している(注17)、③嘉慶本と④道光本ではこうした微細な点も修訂していることが窺える。③嘉慶本と④道光本との間にこうした特定の箇所における修訂が共通して見られることは、④道光本が先んじて刊行されていた③嘉慶本を参照した上でも修訂を行っていた可能性も示唆している。この点は、同じ清代の、かつ近い時代に刊行された両者の関係を考える手がかりの一つになると思われる。その他、第1類の検討でも述べた③嘉慶本の基本的方針(「底本の修訂」)がこの第2類においても同様に確認できる。

なお、特殊な事例としては19を挙げることができる。これは③嘉慶本と④道光本と同様、②万曆本も①嘉靖本の失誤を正すものである(②万曆本では「開通光明」に作る)。②万曆本は陳士元が①嘉靖本と同じ版木を用いて『帰雲別集』に再録したものだ、その際の修訂の跡を確認できる貴重な事例と言える。

〈第3類・表〉①嘉靖本、③嘉慶本、④道光本が同じ

3	2	1	
且 避左右	孔融注	聖人以魄撰魂、 衆人以魂運魄	①嘉靖本
且 避左右	孔融注	聖人以魄撰魂、 衆人以魂運魄	③嘉慶本
且 避左右	孔融注	聖人以魄撰魂、 衆人以魂運魄	④道光本
◎	◎	◎	備考

11	少陰之厥						
10	覺亦夢也						
9	依違兩端者不驗						
8	先王致謹於天人之際						
7	飛星奔星也						
6	寸以内						
5	未嘗動也						
4	孔子夢三槐門						
	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

この第3類に挙げるのは正確に言えば版本間の異同ではない。典拠元と照合して初めて、①嘉靖本(②万曆本)の失誤が③嘉慶本や④道光本でも見落とされた結果、そのまま残ったものと考えられる事例である(第3類・表)「備考欄」の「◎」を参照)。十一例のうち、本文中に見えるものが一例(9)、注釈に見えるものが十例である。

ただし、失誤の程度はさまざまで、明らかに文意が通らないものもあれば、文意自体は通るが典拠元の内容とは異なるものもある。前者の事例として5を見ると、典拠となる『荀子』では、本来ならば心は睡眠時、漫然たる時、使役する時全てにおいて動き続ける、とするが(心、臥則夢、偷則自行、使之則謀、故心未嘗不動也)「解蔽篇」、『夢占逸旨』では「未嘗動也」となり、そもその文意が通らない。『関尹子』を踏まえた1も『莊子』を引いた10も同様のことが言える。また、6では「寸以内」の前に何らかの数字が来るべきだが脱落している。

その他、3の場合は典拠元の『左伝』から、晋の韓厥が夢の中で、明朝の戦いでは戦車の左右を避けて乗るように父親から告げられた話を引く。この点は確かに『左伝』にも「且避左右」(成公二年)と見えるが、阮元の校勘記では「旦」に作る。『芸海珠塵』は嘉慶年間中の刊行で、この時期は阮元が『十三経注疏』の校勘と出版を行った時期と近い。両者の前後関係は定かでないものの、結果としては③嘉慶本・④道光本ともに阮元の校勘を反映しなかったものと考えられる。また4の場合、典拠元の『金楼子』には「昔孔子夢三槐間、豊沛邦有赤蛇、化為黃玉、上有文曰卯金刀字、此其瑞矣」(卷一)のように、孔子が三槐の夢を見て、その

後、未来の帝王出現を知る話が見える（注18）。ところが表の通り、全ての版本は「孔子夢三槐門」としており、明らかに誤っている。

このように、第3類は同一の誤りが各版本を通して残ってしまったという事例であった。そして、第1類にて③嘉慶本が底本の修訂に意を置く一方、失誤を残していたことにこの第3類を加味すれば、③嘉慶本の修訂が必ずしも万全なものではなかったことがわかる。

〈第4類・表〉①嘉靖本、③嘉慶本、④道光本が異なる

	①嘉靖本	③嘉慶本	④道光本	備考
1	周礼大ト掌三兆之	周礼太ト掌三兆之法	三兆	
2	漢書天文志曰	漢天文志曰	漢天文志	
3	礼記檀弓篇	檀弓篇	礼記檀弓	
4	太尹	大尹	衍尹公	■
5	媯始	媯始	周始	■
6	如董豊避枕沐之事	如董豊所避枕沐之事	如董豊所避之事	
7	荘子曰	列子曰	荘子	■
8	周之尹氏産	周之尹氏大治	周尹氏産	
9	順塗而誅其事	順塗而詠其事	順塗而謎其事	■

第4類に該当する異同は九例認められ、全てが注釈におけるものである。典拠元を辿ると、系統I（①嘉靖本・②万曆本）の失誤を③嘉慶本のみが正したと見ることのできる事例は四例あり（第4類・表）。「備考欄」の「■」を参照）、残りの五例は失誤とも言えない程度の改字であった。

以下いくつか事例を挙げる。第4類では③嘉慶本による修訂事例の一つに典拠名の失誤を正すものが確認できる。7で引用されるのは『列子』周穆王篇に見える話だが（注19）、典拠名の出し方が各版本で異なっ

ている。③嘉慶本の「列」は系統Ⅰの「莊」を「列」に正すが、④道光本は単に「日」を削除することどまる。

また8の事例からは、系統Ⅰの字句を改めるといふ処理の性格が、③嘉慶本と④道光本とは異なるということも窺える。8では、①嘉靖本に「周之尹氏産」とあるものを、③嘉慶本では「周之尹氏大治」、④道光本では「周尹氏産」に作るが、実際に『列子』を確認すると「周之尹氏大治」とある。このことから、③嘉慶本における「底本の修訂」は、たとえ失誤とは言えない箇所でも、典拠があれば極力それに沿うよう意図されていた可能性が高いと言える。一方、④道光本の性格は③嘉慶本と明らかに異なる。そこで以下、④道光本に見える他本との異同からこの点について確認したい。

④道光本の最も顕著な特徴は、細部にわたる字句の削減である。主な削減対象となるのは、文意に影響が及ばない程度の字句（「日」、「云」、「其」など）である。また、以下のように、最低限の情報を残す削字の跡も見られる。

- ・①嘉靖本が「周礼大ト掌三兆之」、③嘉慶本が「周礼太ト掌三兆之法」とするのに対し、「三兆」以外の字句を削除する（長柳篇、注、〈第4類・表〉1参照）。
- ・「武王」「文王」をそれぞれ「武」「文」とする（宗空篇、注）。
- ・「天幹十二」「地支十」をそれぞれ「天干」「地支」とする（六夢篇、注）。
- ・「孔子絶糧陳蔡之間」の「之間」を削除する（宗空篇）。
- ・①嘉靖本と③嘉慶本は「小雅斯干之詩曰、乃寢乃興、乃占我夢、吉夢維何、維熊維羆、維虺維蛇、大人占之、維熊維羆、男子之祥、維虺維蛇、女子之祥」とするが、④道光本は「小雅斯干、維熊維羆之詩註」と大幅に削除する（宗空篇、注）。

また、以下のように、「A B」を「B A」にするといった語順の変換も見受けられる。

- ・「治世」↓「世治」、「死生」↓「生死」（ともに昼夜篇）
- ・「善美」↓「美善」、「眉長」↓「長眉」（ともに宗空篇）
- ・「語怪」↓「怪語」（聖人篇）

その他、特に独自の解釈が織り込まれた結果、字句の改変に至ったと思われる箇所もある。例えば、他版本や典拠元となる『莊子』では「成然寐、遽然覺」とあるが、④道光本は「成然夢、遽然覺」（昼夜篇）とする。「寐」から「夢」への改字は、眠ることが必然的に夢を見ることに繋がるといふ発想に拠ったものと推測される。

以上のことから、④道光本の特徴は「底本の修訂」というよりも、字句や表現の削除や省略、改変を自身の裁量で行う点にあると言えよう。理解に支障を来さない程度の字句を削ることなどは、読みやすい文章を提供することにも繋がり、一見読者への配慮とも取れそうだが、一方で商業主義もしくは独断的な行為とも取れる。また、誤字脱字や（注20）、本文と注釈の混同や脱落（注21）が比較的に見受けられることを踏

まえば、④道光本における修訂の精度は③嘉慶本より劣ると言わざるを得ないであろう。

三、おわりに

以上、本稿では『夢占逸旨』の版本間に見える異同を第1類〜第4類に分類し、特に清代の版本である③嘉慶本、④道光本の性格について考察を進めた。『夢占逸旨』内篇は、主に朱子学的な観点から夢と占夢の構造を論じるものであり、後世においても明代夢書における先駆的成果としてその意義は認められていた。清代以降は③嘉慶本によりその存在はより広く認知されるが、原初形態を残す系統Ⅰとの関係についてはそれぞれ異なる性質を持つと言える。

系統Ⅰに対する最大の「情報改竄」として両者に共通するのは注釈者陳堦の名を削除したことであるが、一方で第1類〜第4類の検討を踏まえると、③嘉慶本は「底本の修訂」を基本方針とし、系統Ⅰに対する目配りの跡が確認できるものであった。『芸海珠塵』の撰者である吳省蘭は南匯の藏書家であり、嘉慶中に刊行した『芸海珠塵』は全八集一三六種を収め、後に女婿の錢熙輔により壬、癸の二集(四二種)が刊行された。『夢占逸旨』に関しては、『芸海珠塵』刻入の際に自身の藏書を底本として校訂を行った可能性もある。

一方、④道光本はあらゆる点で③嘉慶本に劣ると言わざるを得ない。異体字に対する処理について例を挙げると、『夢占逸旨』古法篇には、『淮南子』から「枝解葉貫」(倣真訓)を引く箇所がある。この箇所を①嘉靖本は「枝解葉貫」(古法篇)とするが、③嘉慶本は「解」を「解」に作り、④道光本は「解」に作る。しかし「解」が「解」の異体であることを踏まえると、③嘉慶本と④道光本が「解」を改めた際、おそらく③嘉慶本は典拠元を踏まえつつ「解」に作り、④道光本は誤って「解」と作った可能性が高い。このように、修訂の過程を比べてみても、④道光本にはやや粗放なところが見える。④道光本の特徴は随意的な改変にあると言えるが、これは『夢占逸旨』の本旨を大幅に変えるというよりも、本稿にて見てきたとおり微細な字句や表現の範囲に収まるものであった。しかし、こうした態度は誤字脱字といった失誤としても現れ、結果として版本の精度を落とすことにも繋がってしまったと思われる。

ここで、本稿にて取り上げた版本を対象として再度その系統をまとめると、おおよそ以下のようになる。

系統Ⅰ：注釈者である陳堦の名を残す(①嘉靖本、②万曆本)

系統Ⅱ：典拠元にも目配りしつつ、系統Ⅰの失誤の修訂に主眼を置く(③嘉慶本)

系統Ⅲ：字句や表現の削除および省略、語順の変換などを行うが、一方で誤字や脱落などの失誤も

目立つ(④道光本)

注釈者である陳堦の名を削除した③嘉慶本・④道光本では、注釈が陳士元による自注と誤認されるおそ

れがあるため注意を要することは既に別稿で指摘した(注22)。そうなることややはり①嘉靖本の優位性を考えるを得ないが、本稿にて検討した各版本の性格を鑑みれば必ずしもそうとは言えないのが実情であろう。勿論、①嘉靖本が持つ原刊本としての価値は揺るがないが、失誤も確認できる以上、③嘉慶本を主とする他版本によつて補完することも必要になるだろう。

なお、今回取り上げなかった『夢林玄解』(崇禎年間刊本)は、「陳公の未だ備わらざるを広むる」という大義名分を掲げ、『夢占逸旨』に大幅な改竄を行うものであった(注23)。こうした動向の背景には、当時における夢観の変容も多分に関係するであろうが、同時に『夢占逸旨』が当時の夢研究における指標的存在であったことも一因としてあったと思われる。その後、公式的な立場を獲得したのは『夢林玄解』所収の「増補版」『夢占逸旨』ではなく、『夢占逸旨』本来の面目は一応保たれながらも失誤については修訂が施された『芸海珠塵』所収の『夢占逸旨』であった。

『夢占逸旨』という一冊の夢書が時代と地域を超えて残してきたその足跡は必ずしも直接的、単一的ではない。明末から描かれてきた複数の軌道を現代において正確に辿り直すことは容易でないが、それらの足跡の上に立ち止まることは『夢占逸旨』が歩んできた道を追うことであり、本稿では複数の版本を用いてそれを試みたに過ぎない。今後は、この問題の更なる深化に加え、夢をモチーフとする文学作品や夢書をめぐる当時の精神風景についても考察を進めたい。

注1 湯浅邦弘「中国古代の夢と占夢」(『島根大学教育学部紀要 人文・社会科学』二二―二、一九八八年)

注2 以下、主な史書の図書目録を列挙すると以下の通り。

●『漢書』卷三十芸文志：「黄帝長柳占夢十一卷」「甘德長柳占夢二十卷」●『隋書』卷三十四經籍志：「占夢書三卷 京房撰」「占夢書一卷 崔元撰」「竭伽仙人占夢書一卷」「占夢書一卷 周宣等撰」「新撰占夢書十七卷 并目錄」「夢書十卷」「解夢書二卷」「雜占夢書一卷」「目暲書各一卷」(梁有師曠占五卷、東方朔占七卷、黄帝太一雜占十卷、和菟鳥鳴書一卷、王喬解鳥語經、唳書、耳鳴書、目暲書各一卷、董仲舒請禱函三卷、亡。)●『旧唐書』卷四十七經籍志下：「占夢書二卷 又三卷 周宣撰」●『新唐書』卷五十九芸文志三：「周宣占夢書三卷」「僧紹端神积応夢書三卷」「詹省遠夢应録一卷」「盧重玄夢書四卷」「柳璨夢雋一卷」「周公解梦書三卷」「王升縮(或無「縮」字)占夢書十卷」「陳襄校定夢書四卷」●『宋史』卷二百六芸文志五「盧重玄夢書四卷」「柳璨夢雋一卷」「周公解梦書三卷」「王升縮(或無「縮」字)占夢書十卷」「陳襄校定夢書四卷」●『明史』卷九十八芸文志「張幹山古今應驗異夢全書四卷 揚州衛指揮」「陳士元夢占逸旨八卷」「張鳳翼夢占類考」

注3

二〇〇七年に湖南大学岳麓書院が購入した秦簡二千百枚(香港の古董市場に流出していたものであるため出土地は不明)に加え、二〇〇八年に香港の收藏家が寄贈した全七十六枚の竹簡をまとめて「岳麓書院藏秦簡(略称「岳麓秦簡」)」と呼ぶ。この岳麓秦簡の中に含まれていた「占夢書」と呼ばれる

文献は、従来最古の占夢書とされてきた敦煌文書占夢書群を遙かに遡る占夢書として注目されている。

注4 詳細については、齋藤喜代子「中国文学における夢について」(『大東文化大学創立六十周年記念中国学論叢』、一九八四年)を参照。

注5 大木康氏は楊繩信『中国版刻綜録』をおおよその目安とし、宋から明末までの刊行点数のうち、約六五%を占める書物が嘉靖・万暦から崇禎にいたる明末に刊行されたものであると指摘している。大木康『中国明末のメディア革命―庶民が本を読む―』(刀水書房、二〇〇九年)

注6 陳士元(一五二八―一五九七)。字は心叔、号は養吾、応城の人)は、嘉靖二十三年(一五四四)に進士に及第し、その後は灤州の知となるが、官吏であったのはわずか数年の間であった。豊富な著述を残し、その内容は博覧堅実と高く評された。

注7 以下、明清時代の蔵書目録に収録される書目を挙げる(書名と巻数のみを記し、必要に応じて編著者名や備考を「」にて記す)。

明代

●『趙定宇書目』(夢占類考・解夢書一本・夢占外旨) ●『文淵閣書目』卷十五(夢書(一部一冊闕))・解夢書) ●『内板經書紀略』(解夢書大全(二本七十葉)) ●『行人司重刻書目』(歸雲別集(二十本二卷)) ●『晁氏宝文堂書目』(古今紀夢要覽(類書類))・解夢厭恠書(陰陽類)) ●『国史経籍志』(占夢書三卷(京房))・又一卷(崔元))・又三卷(周宣))・又一卷(竭伽仙人))・又四卷(盧重元))・夢雋一卷(柳璨)・解夢録一卷(僧紹端)・夢占逸旨八卷(国朝陳士元)

清代

●『文選樓蔵書記』(夢占類考十二卷) ●『蔵園訂補邱亭知見伝本書目』(補夢占類考十二卷) ●『万卷精華樓蔵書記』(夢林元解三十四卷) ●『鄭堂読書記』(夢占逸旨六卷) ●『鄭堂読書記補逸』(夢林元解三十四卷) ●『平津館鑑蔵記書籍』(夢書) ●『天一閣書目』(夢兆要覽二卷) ●『浙江採集遺書総録』(夢占類考十二卷・夢兆要覽) ●『虞山錢遵王蔵書目録彙編』(夢書一卷) ●『持静齋書目』(夢占逸旨八卷) ●『千頃堂書目』(童軒夢徵録(案遺書目作夢徵要覽二卷)とある)・古今応驗異夢全書四卷・夢占逸旨八卷・夢占類考十二卷・解夢心鏡五卷・古今纂要夢珍故事三卷・古今記夢要覽二卷・古今夢徵)

注8 『夢占逸旨』は明の嘉靖四十一年(一五六二)に編纂されたもので、陳士元が広範な資料を涉猟し、自身の思索を盛り込んだ夢の専論である。全体は八卷三十篇から成り、内篇十篇(卷一―二)、外篇二十篇(卷三―八)に大別されている。この内、内篇は夢や占夢について十の視点から説いており、理論的性格が強い。外篇は夢に関する様々な事例を蒐集し、それらを内容ごとに篇としてまとめて配列する。

その形式は、『芸文類聚』『太平御覽』などを代表とする類書と似る。

注9 『夢占逸旨』の近辺で確認できる夢書を刊行順に並べると以下のようになる。

古法篇	六夢篇	聖人篇	宗空篇	衆占篇	昼夜篇	長柳篇	真宰篇	『夢占逸旨』内篇
		無邪篇	釈妄篇	秘義篇		原始篇	真宰篇	(b)『夢林玄解』
		聖人篇	宗空篇	衆占篇		長柳篇	真宰篇	(c)『夢林玄解』

(a) (b) (c)のうち『夢占逸旨』の大部分を引用するのは(b) (c)の『夢林玄解』である。同一書名だがそれぞれ刊行時期の異なる版本であり、内容にもかなりの異同が見える。本書における『夢占逸旨』引用の特徴を内篇に限って示せば、(一)本文のみが引用されている。(二)内篇十篇のうち六篇のみを引用する。(三)一部の篇名と内容が改竄されている(二) (三)については次表参照)。(二) (三)については次表参照)。

- ① 嘉靖本：嘉靖四十一年(一五六二)刊本『夢占逸旨』
- ② 万曆本：万曆十一年(一五八三)刊本『帰雲別集』所収『夢占逸旨』
- (a) 万曆十三年(一五八五)刊本『夢占類考』
- (b) 崇禎九年(一六三六)刊本『夢林玄解』
- (c) 康熙年間刊本『夢林玄解』
- ③ 嘉慶本：嘉慶年間刊本『芸海珠塵』所収『夢占逸旨』
- ④ 道光本：道光十三年(一八三三)、『帰雲別集』重刻本所収『夢占逸旨』

吉事篇	感変篇	感変篇
感変篇	感変篇	感変篇

これら二種の『夢林玄解』が引く『夢占逸旨』も版本の一つとすることはできるだろうが、内篇に関してはその約半数を削除しているため、本稿の趣旨の一つである「内篇全文の校勘」とは合致しない。よって本稿では『夢林玄解』所収の『夢占逸旨』については検討対象から外し、『夢林玄解』所収の『夢占逸旨』については別稿で論じたい。なお、『夢林玄解』の成立については、大平桂一氏『夢林玄解』の成立雲なす證言（『中国文学報』八十二、二〇一二年）を参照。氏によれば、『夢林玄解』に見える陳士元『夢林玄解小引』は何棟如による偽作であり、これは『夢占逸旨』全体がそのまま取り込まれた際に陳士元と関連づけられたものだという。

注 10 吳省蘭、字は泉之。南匯の藏書家で、乾隆年間の進士。博学多聞かつ書籍収集を好んだことで知られ、工部左侍郎、補侍講、侍読学士を歴任した。李珠安、陳偉芸『中国藏書家辞典』（湖北教育出版社、一九八九年）

注 11 ①嘉靖本、②万曆本ともに、台湾中央研究院傅斯年図書館蔵。なお、筆者による①嘉靖本の実見調査とその流伝については、清水洋子「夢書の受容に関する考察——『夢占逸旨』を例として」（『中国研究集刊』称号（総六十号）二〇一五年六月）を参照。

注 12 これらの異同については、筆者が明代の版本入手以前に『芸海珠塵』所収本と『帰雲別集』所収本を用いて作成した『夢占逸旨』内篇訳注（一〇七・了）（『中国研究集刊』第四十七〜五十六号、二〇〇八〜二〇一三年）をもとにしている。

注 13 ①嘉靖本と④道光本が同じであっても、比較対象となる③嘉慶本の対応部分が空格や字潰れで判読不明の場合は掲載の対象外としている。例えば、真宰篇の注に見える「徳流氣薄而生者也」（①嘉靖本・④道光本）は、③嘉慶本では「徳流氣薄而□□也」となっている。

注 14 現時点では、③嘉慶本が①嘉靖本と②万曆本のどちらを底本としたのかを確定することは困難であるため、③嘉慶本の修訂対象については①嘉靖本と②万曆本の双方を含む「系統Ⅰ」という表現を暫定的に用いる。

注 15 「霾雨土也」は実際は毛伝の記述だが、①嘉靖本と③嘉慶本は「詩箋云、霾雨土也」とし、④道光本は「毛詩邶詩箋、霾雨土也」としている。

注 16 ①嘉靖本と②万曆本がほぼ一致することと書式の都合上から、本稿の表では②万曆本を挙げているが、表に挙げた箇所に関しては一部を除いて（この点については後述）①嘉靖本と同様である。ただし、文脈上②万曆本の名前を明記することが望ましい場合は「①嘉靖本（②万曆本）」のように両者を並記し、②万曆本も①嘉靖本と同様であることを示しておく。

注 17 傍線部が誤字の部分。正しくは「幡綽」「祿山」。如繡綽占祿山怪夢之類、柳氏旧聞曰、安祿山叛、

黄幡綽陷在賊中、緑山夢衣袖長至階下、幡綽曰、当垂衣而治、禄山又夢殿中窓榻倒立、幡綽曰、革故從新、後禄山敗、玄宗自蜀歸詰問幡綽、幡綽曰、臣昔占夢必知其不可也、玄宗曰、何以知之、対曰、衣袖長者、出手不得也、窓榻倒者、胡不得也、玄宗笑而赦之。」(古法、注)

注 18 「槐」はえんじゆの木。周王朝では三本の槐を植えて三公の座としたことから、転じて三公のことを言う。なお、類似の記述は『宋書』符瑞志、『孝経援神契』にも見える。

注 19 覚醒時間と睡眠時間がそれぞれ異なる「古莽之国」、「中央之国」、「阜落之国」の話や、資産家でありながら睡眠時は労役夫となる夢に苦しむ尹氏の話。

注 20 例えば、宗空篇には「入」を「人」に、「晋」を「普」に、「行」を「興」に誤つて作る事例が見えるし、感変篇には「蕉」を「焦」に作り、また、本来「饑人常夢飽」とあるはずの「飽」が脱落するなどの失誤が確認できる。

注 21 例えば、他の版本では本文に入れられている「三夢、一曰致夢、二曰躋夢、三曰咸陟」が、④道光本では前節の注釈の中に入れられている(長柳篇)。また、①嘉靖本(②万曆本)、③嘉慶本には『詩経』を引いて「無羊之詩曰、牧人乃夢、衆維魚矣、旒維旗矣、大人占之、衆維魚矣、実維豊年、旒維旗矣、室家溱溱」とするものが(ただし③嘉慶本では「太人」)④道光本では完全に脱落している(宗空篇)。

注 22 清水(二〇一五)前掲論文。

注 23 注 9 を参照。なお、この崇禎年間刊本には、「応城 養吾陳士元 纂輯」の横に「茂苑 紫水黄夢堂 増補」と記載がある。

The path and purpose of alterations in various editions of *The Lofty Principles of Dream Interpretation* — perspectives from discussions about differences in *NeiBian*

Yoko Shimizu

Chen Shiyuan's (陳士元) *The Lofty Principles of Dream Interpretation* (夢占逸旨) was published during the late Ming dynasty. This book has several editions. Of these editions, the most widely distributed editions now are the *Guiyunbieji* (歸雲別集) edition and the *Yibaizhuchen* (芸海珠塵) editions that were published in the Qing dynasty. However, no scholars have considered about the types and relations between these editions. So, in this paper, based on the discussions about differences between the editions which were published in the Qing dynasty and ones which were published in the late Ming dynasty (editions from Jiajing year (嘉靖年間本) and Wanli year (萬曆年間本)), I will discuss a few points and paths taken by the various editions of *The Lofty Principles of Dream Interpretation*.

【 Keyword: *The Lofty Principles of Dream Interpretation*, Chen Shiyuan, the late Ming dynasty 】